印度學佛教學研究第五十四巻第一号　平成十七年十二月

宥快の煩悩即菩提観

林　山　ま　ゆ　り

一、はじめに

宥快（一三四五～一四一六）は長覚（一三四〇～一四一六）と共に高野山教学の大成者として著名である。宥快の残した厖大な数の著作群は現在の高野山教学の礎となっている。宥快の著作中、特に、『宝鏡鈔』は、立川流を批判した書として注目されてきた。[1]『宝鏡鈔』では、宥快が立川流と称する一流派の教義や、それが典拠とする経典類を邪法・邪見といった言葉を用いて批判している。煩悩即菩提もそのような教義のうちの一つである。煩悩即菩提は大乗の通説として説かれるものであるが、宥快は、立川流では邪見にもとづいて煩悩即菩提の義を曲解しているとし、それを破している。

小稿では、宥快が立川流の煩悩即菩提を邪見とするのはどのような理由からなのか、また、真言宗の煩悩即菩提をどのように規定していたのかについて考察してみたい。

二、『宝鏡鈔』『大日経疏鈔』にみえる煩悩即菩提

『宝鏡鈔』には、煩悩即菩提に関する二つの問答がある。その一つめの問答では、「依二諦理一談二煩悩即菩提一、大乗実教之宗義也。不レ知二実義一、只認二妄情一以二煩悩一執二菩提一沈二淪三途一。是云二邪見一也。[2]」と述べている。つまり、立川流の煩悩即菩提は、実義を知らずに、妄情を認めて煩悩を菩提と執する邪見であると破し、大乗実教の煩悩即菩提はそれぞれの宗の諦理によってはじめて成り立つものであると言う。

宥快が重んじる真言の実義とは、六大無碍・阿字本不生の道理や『十住心論』の序の一文に基づく説である。『宝鏡鈔』からは立川流も同様にこの文によって理解していることを知ることができる。空海の著作では、『十住心論』第七住心にも煩悩即菩提の語が見えるが、第七住心では三論の義を挙げているだけであるので、空海の時点では煩悩即菩提について、真言宗としてどのように理解すべきであるかを詳細に論じて

いるわけではないと言える。

続く二つめの問答でも、「雖下耳聞二煩悩即菩提一、口説中煩悩即菩提上、心不レ知二其旨一、認二元凡情一執二菩提一、弥行二煩悩一者、可レ増二長輪廻一。争可レ証二得如来一切智智一乎」[3]と、煩悩即菩提の所由や旨を知らなければならないという。では、宥快は真言宗における所由や旨とは一体どのようなものであると考えていたのであろうか。

次に宥快の代表的な著作である『大日経疏鈔』の中に見える煩悩即菩提観について取り上げてみる。『大日経疏鈔』の除蓋障三昧を釈した箇所では、次のように煩悩即菩提を大乗の通談とし、法相・三論・天台・華厳・真言の五重に解釈している。

付レ之、煩悩即菩提、総諸大乗通談也。故荘厳論由レ離二法性一外無二別有諸有諸法一。是故如レ是説二煩悩即菩提一。文三論嘉祥不レ断二煩悩一而入二涅槃一。文天台無明塵労即是菩提判。華厳入二三毒一三徳円。入二一塵一一心浄。文但法相等意断二煩悩一得二菩提一故、煩悩即菩提義存。三論意衆生顛倒以二菩提一為二煩悩一故、如実覚時、煩悩外無二菩提一義煩悩即菩提談也。天台穏(マヽ)入皆如釈故、帰二真如一其義釈。華厳以二真妄物我挙一全収義一釈成。所詮何理性由、煩悩即菩提義談也。今自宗煩悩即菩提、即事而真実談故、煩悩即体不レ動心仏秘号談也。故欲・触・愛・慢煩悩成二五秘密瑜伽一。三毒五逆皆心仏密号名字也有二御釈一。此意也[4]。

このような五重の義は宥快だけに指摘されるものではなく、例えば道範の『声字実相義抄』にも「但同雖レ云二煩悩即菩提一、四箇大乗并真言、其義五重、非レ無二浅深一、留レ心可レ思レ之」[5]と見える。宥快は右の文で真言宗の煩悩即菩提は即事而真の実談であるから煩悩がそのまま心仏の祕号である、と説明している。しかし、この記述では他の大乗諸宗と比較して真言の義が挙げられているものの、具体的な真言の義については、はっきりと述べられていない。

三、『煩悩即菩提義』における煩悩即菩提

それでは次に、より具体的に煩悩即菩提について論じた著作である、『煩悩即菩提義』の内容について検討する。

『煩悩即菩提義』は未翻刻の小篇であるが、現存する『煩悩即菩提義』はすべて写本で、版本は現在確認していない。宥快の著作中に『煩悩即菩提事』という書名が確認されるが、これは『煩悩即菩提義』と同一内容である。現在確認しているのは、目録類に記載されていない二本を加え、以下に挙げる八本である。『国書総目録』に記載されているものは〔国〕、『仏書解説辞典』に記載されるものは〔仏〕と記した。

『煩悩即菩提義』一冊　高野山三宝院　書写年不詳〔国〕

／高野山大学（『大日経教主義』と合本）天保十一年写本

『煩悩即菩提事』一巻　高野山大学　文久二年写本〔仏〕〔国〕

／高野山金剛三昧院（遍計所執之事と合本）安政三年写本〔国〕／高野山大学　万延元年写本／高野山宝亀院　江戸時代写本〔仏〕〔国〕／龍谷大学　天保十五年写本〔仏〕〔国〕／大正大学　文政七年写ヵ〔仏〕

『煩悩即菩提義』の著作年代について、諸本には、応永二十五年の奥書が見えるのであるが、これはすでに指摘があるように、宥快の死後の年に当たることから、応永十五年を誤写したものと考えられ、宥快六十四歳の頃のものであると推測される。(6)

妙瑞の『秘密法訓』に「宥快大阿闍梨耶、於二此門中一分二十重別(7)」とみえるように、宥快は、『煩悩即菩提義』において、煩悩即菩提を十住心を意識した十の階梯に分類、整理している。その十重の義とは次の通りである。

①凡夫のための煩悩即菩提／②小乗・法相宗のための煩悩即菩提／③『守護経』（縁覚乗）に説かれる煩悩即菩提／④法相大乗并びに性宗の煩悩即菩提／⑤三論宗に説かれる煩悩即菩提／⑥天台などの法性宗に説かれる煩悩即菩提／⑦天台に説かれる煩悩即菩提／⑧天台に説かれる煩悩即菩提／⑨華厳に説かれる煩悩即菩提／⑩真言宗に説かれる煩悩即菩提

この分類においては、法相や天台における義の重複がみられ、十住心通りの階梯になっているとは言えない。だが、大乗の義とされる煩悩即菩提の語に、凡夫や小乗の位を加えていることから、十住心を意識しているということが十分窺えるだろう。では、真言宗の義とはどのようなものであるのだろうか。

十番目に挙げられる真言宗の義では、二つの異説と二つの正解があげられる。第一の正解には次のように見える。

一義云、自宗教門立二十住心三劫一次第、従レ浅立レ深、所二究竟一為二真言所詮一、仍九種住心所談煩悩即菩提義、各有二其由一者也。其中至二九住心一以二事々無碍義一立二煩悩菩提円融無碍義之義一。彼為レ由此上真言煩悩即菩提義、深可レ意レ得也。真言意六大無碍、四万不離、三密加持故迷・悟、染・浄、無碍渉入、不レ着二一相一故云二煩悩即菩提一也。(8)

真言の教門では第九住心までのそれぞれの煩悩即菩提の道理を認めた上で、さらにその上に位置する真言の教門における煩悩即菩提の義を深く知るべきであることを主張し、また、六大無碍などの『即身成仏義』で説かれるような渉入説にのっとって、無碍渉入し偏ることがない状態になることが、真言の煩悩即菩提の条件であるとする。この一義に関しては、さまざまな問答がなされ、特に、煩悩即菩提の証得についての問答では、立川流の教説に触れ、次のように述べている。

問。煩悩即菩提義、真言行者、如何修レ之可二証得一耶。
答。邪見人行二男女欲事乃至肉食飯(ヲス)（飲ヵ）酒一、此当相即真言即身成仏也云。此立川流秘蔵法云也。顕密諸教強煩悩即菩提云別非

レ行二一法。密教意、修二阿字観一行二日・月輪観等一行二五相・三密妙行一自然貪・瞋・癡等煩悩即内証法門功徳成也。

宥快は、煩悩即菩提の正しい旨を知らずに真言の即身成仏をとなえる立川流を破し、一方で真言行者は、煩悩即菩提の旨を知った上で、真言の教えに基づいた、阿字観や日・月輪観といった観想行や五相成身観・三密行などを行うことが必要であるとするのである。

四、おわりに

『煩悩即菩提義』については一義しか触れられなかったが、宥快は、真言宗においては、煩悩即菩提の旨を正しく理解した上で、真言宗の教義にのっとった行を行うことが必要である、と主張する。教義だけではなく、観想行などの行を平行して重視し、十住心の階梯を重視するといった基本にかえることを推し進めた姿勢が宥快の『煩悩即菩提義』からは窺い知ることができる。小稿では、紙幅の関係上、全体の構成と内容の一部を紹介するにとどまった。宥快の邪教に対する思想内容の全体的な解明については、今後の課題としたい。

1　立川流の研究としては、次のようなものが挙げられる。水原堯栄『邪教立川流の研究』、櫛田良洪『真言密教成立過程の研究』第二編・第四章「邪流思想の展開」、守山聖真『立川邪教とその社会的背景の研究』、真鍋俊照『邪教・立川流』、Pol Vanden Broucke *Hokyosho, the compendium of the precious mirror of the Monk Yukai* 等。また、最近の論攷としては、Stefan KÖCK *The Dissmination of the Tachikawa-Ryu and the problem of Orthodox and Heretic Teachings in Shingo buddhism*（『インド哲学仏教学研究』七）、彌永信美「立川流と心定『受法用心集』をめぐって」（『日本仏教綜合研究』第二号）等が挙げられる。彌永氏は、立川流として一括りにされている思想を、「立川流」という表現を廃して「中世の性的宗教」または「思想」と言ったほうが間違いがないのではないか、と論じている。宥快と中世思想との関係についても検討が必要であるが、今回は立ち入らず、宥快が著作中で破した特定の流派として、「立川流」の名称を使用した。　2　大正七七・八五一頁上。　3　大正七七・八五一頁中。　4　大正六〇・一四六頁中。　5　真全一四・二七頁上下。　6　『長覚尊師と宥快法印』（二七二頁）参照。　7　続真全二三・三一五頁下。なお、『秘密法訓』第四煩悩即道門には『煩悩即菩提義』のほぼ全文の取意文が引用されている。　8　以下の引用文に関しては、高野山大学所蔵、『煩悩即菩提事』文久二年写本を翻刻したものを使用した。

附記　『煩悩即菩提義』全文の翻刻及びその内容については『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第五十一輯に掲載する予定である。

〈キーワード〉　宥快、煩悩即菩提、『宝鏡鈔』、『大日経疏鈔』

（早稲田大学院博士課程）

Jushuin Gimonshō (決答授手印疑問抄). Hōnen, Shōkō (聖光), and subsequently Ryōchu, throughout their lives held a relative, not an absolute, standpoint. The typical explanation of this standpoint is just a metaphor of two rivers and a white path (*niga-byakudō* 二河白道), and we must try to understand the three thoughts (*sanjin* 三心) through this metaphor.

33. On the *Dacheng wuliangshou zhuangyan jing* 大乗無量寿荘厳経 in Shōko's Works

Shōji GUNJIMA

The *Dacheng wuliangshou zhuangyan jing* 大乗無量寿荘厳経 (*Zhuangyan jing* 荘厳経) was translated in the Song period as another version of the *Wuliangshou jing* 無量寿経. No one has explained when this text was imported into Japan. Shōko noted in one of his works that he saw a copy of the *Zhuangyan jing* at the Munakata shrine. So we know that the *Zhuangyan jing* was imported before the Koryō printed version. Shōko quoted this text in his *Jōdoshū yōshu* (*Seijūyō*) and *Tetsu senchaku hongan nenbutushū* (*Tetsusenchaku*). Therefore, we know that Shōko made a careful reading of the *Zhuangyan jing* and tried to resolve the difficult points of the original text. Shōko's works, *Seijūyō* and *Tetsu senchaku*, that quoted the *Zhuangyan jing* were written in his later years. The most explicit details were expounded in the *Tetsu senchaku*. I believe Shōko's thought changed from the *Seijūyō* to the *Tetsu senchaku*.

34. Yūkai's View of *Bonnō-soku-bodai*

Mayuri RINZAN

In this article, I examine how Yūkai understood the concept of *bonnō-soku-bodai* (*kleśa* or afflictions are the same as *bodhi* or enlightenment). Yūkai (1345-1416) was a Muromachi era scholar-monk of the Shingon School. In his first work, the *Hōkyōshō*, he criticized the heretical Tachikawa Sect emphasizing their misunderstanding of *bonnō-soku-bodai*. In his treatise, the *bon-*

nō-soku-bodai-gi, he used Kūkai's classification from *The Ten Stages of the Development of Mind* (*Jūjūshinron*) to analyze and rank *bonnō-soku-bodai* in ten stages. He insisted that each stage be considered carefully and that *bonnō-soku-bodai* be accurately understood according to the Shingon School's teachings. Yūkai's fundamental interpretation of *bonnō-soku-bodai* was based on Kūkai's philosophy and then further developed.

35. Hōnen's View of Human Beings: A description of the "Notion of Threefold Mind"

Sadataka ICHIKAWA

The "Notion of Threefold Mind" is a sermon in the Daigobon *Hōnen Shōnin Denki*. But this sermon has many problems, and there is the debate whether it is Hōnen's own sermon or not. Here I propose a new position.

The "Notion of Threefold Mind" has 27 articles. But some articles contradict each other. The first article has been expressed from the position that the Threefold Mind is given from Amida Buddha. However, the third has been expressed from the position that the Threefold mind is the mind which sentient beings should possess.

In the "Ryaku-senchaku" (summary) of the *Senchakushu*, Hōnen has taught that sentient beings have the ability for the desire to escape from the cycle of birth-and-death. So the first article seems not to be Hōnen's thought.

Also the fourth and fourteenth articles are described from a different idea. The fourth's thought differs from Hōnen's view of a human being.

From such a viewpoint I suggest that the "Notion of the Threefold Mind"is not a sermon by Hōnen, but that it was compiled from memorandums (of Genchi, Hōnen's disciple), either of Hōnen's sermon or of ideas other than Hōnen's.

36. "The Answer to the Kamakura Second Degree Zen Nun" and "The Answer to Tsunoto no Saburo Entering the Way"(on September 18)

Haruki KADONO